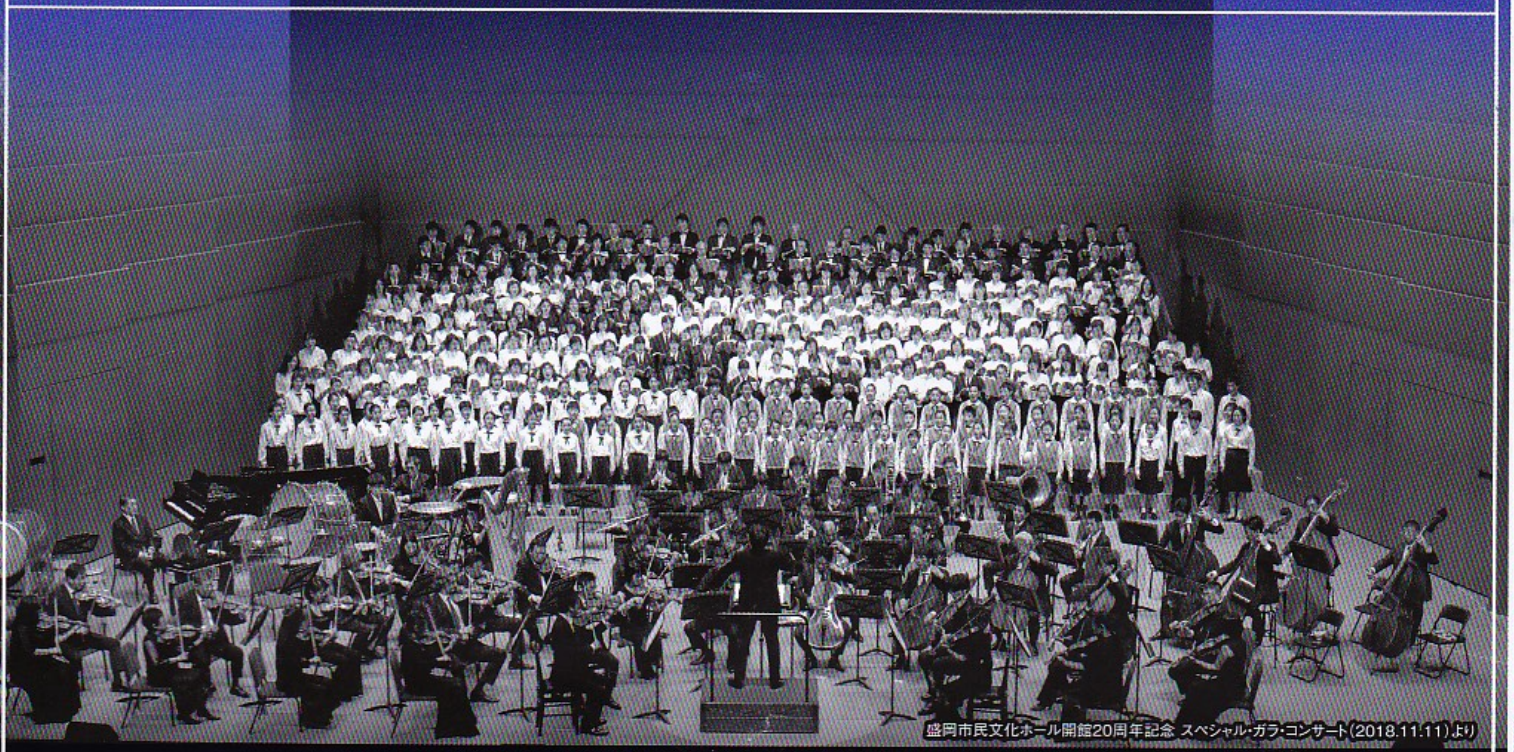
SENDAI PHILHARMONIC ORCHESTRA

名曲コレクション
仙台フィルハーモニー管弦楽団

仙台フィルハーモニー管弦楽団

もりおか「第九」特別演奏会



盛岡市民文化ホール開館20周年記念 スペシャル・ガラ・コンサート(2018.11.11)より

盛岡 第九

SENDAI PHILHARMONIC ORCHESTRA KEN TAKASEKI

2019年11月17日(日) 午後3時開演

盛岡市民文化ホール・大ホール

主催：公益財団法人 仙台フィルハーモニー管弦楽団　共催：盛岡市、公益財団法人 盛岡市文化振興事業団、岩手日報社
協賛：東北電力株式会社　協力：岩手県合唱連盟
後援：IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、NHK盛岡放送局、河北新報社、デーリー東北新聞社、盛岡タイムス社、エフエム岩手

このコンサートは東北電力が協賛しています。

仙台フィルハーモニー管弦楽団名曲コレクション

もりおか「第九」特別演奏会

ベートーヴェン：「レオノーレ」序曲 第3番 ［約15分］

L.v.Beethoven:"Leonore" Overture, No.3

ベートーヴェン：交響曲第9番 ニ短調 作品125「合唱つき」［約70分］

L.v.Beethoven:Symphony No.9 in D minor, "Choral" Op.125

Ⅰ. Allegro ma non troppo, un poco maestoso

Ⅱ. Molto vivace

Ⅲ. Adagio molto e cantabile

Ⅳ. Presto-Allegro assai-etc.

指　　揮／高関　健 Conductor／TAKASEKI Ken

ソプラノ／中江　早希 Soprano／NAKAE Saki

メゾ・ソプラノ／相田　麻純 Mezzosoprano／AIDA Masumi

テノール／宮里　直樹 Tenor／MIYASATO Naoki

バリトン／大沼　徹 Baritone／ONUMA Toru

合唱監督／山田　靖了 Chorus Director／YAMADA Yasunori

合唱指揮／佐々木正利 Chorus Master／SASAKI Masatoshi

合　　唱／もりおか「第九」特別合唱団 Chorus／Special Chorus for"Morioka－Beethoven 9th"

コンサートマスター／神谷　未穂 Concertmaster／KAMIYA Miho

客演首席ヴィオラ／金子　なお Guest Principal Viola／KANEKO Nao

管　弦　楽／仙台フィルハーモニー管弦楽団 Sendai Philharmonic Orchestra

〈本公演はおよそ85分を予定しておりますが、休憩がございませんので、あらかじめご了承ください。〉

■ホール内での飲食・喫煙は固くお断りいたします。　■演奏中の入退場は他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

■携帯電話の電源はお切りください。また、音の出る電子機器は演奏中に鳴らないようにご注意ください。

■許可のない写真撮影、録音・録画は固くお断りいたします。　■未就学児のご入場はできません。

プロフィール

指　揮／高関　　健（仙台フィル レジデント・コンダクター）

Conductor／TAKASEKI Ken

国内主要オーケストラで重要なポジションを歴任。海外への客演も多く、サンクトペテルブルグ・フィル定期演奏会では聴衆や楽員から大絶賛を受ける。新国立劇場「夕鶴」等オペラでも好評を博し、世界的ソリストや作曲家、特にマルタ・アルゲリッチからは3回の共演を通じて絶大な信頼を得ている。現在、東京シティ・フィル常任指揮者、京都市響常任首席客演指揮者、仙台フィルのレジデント・コンダクター、静岡響ミュージック・アドヴァイザー。東京藝大指揮科教授 兼 藝大フィルハーモニア管首席指揮者。2019年3月に、ウラジオストクとサンクトペテルブルグにおいて、『ロシアにおける日本年』の一環として團伊玖磨のオペラ「夕鶴」を指揮。
twitter.com/KenTakaseki

ソプラノ／中江 早希

Soprano／NAKAE Saki

北海道出身。北海道教育大学岩見沢校芸術課程音楽コース声楽専攻卒業。東京藝術大学修士課程音楽研究科声楽専攻独唱科、同大学院博士後期課程を修了。在学時、ハンス・アイスラーの歌曲を研究し、大学院アカンサス賞、三菱地所賞受賞。第27回道銀芸術文化奨励賞受賞。第14回日本モーツァルト音楽コンクール声楽部門第2位。第12回中田喜直記念コンクールにて大賞を受賞。第3回ジュリアード音楽院コンクール第1位。

メゾ・ソプラノ／相田 麻純

Mezzosoprano／AIDA Masumi

東京藝術大学声楽科卒業、同大学院修士課程および博士後期課程の音楽研究科オペラ専攻を修了し、博士の学位を取得。在学中に安宅賞、アカンサス音楽賞および同声会賞受賞。第12回東京音楽コンクール第3位入賞。第77回日本音楽コンクールおよび第9回藤沢オペラコンクール入選。明治安田クオリティオブライフ文化財団の奨学生としてイタリアのパルマ音楽院に留学。洗足学園音楽大学および桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。

テノール／宮里 直樹

Tenor／MIYASATO Naoki

東京藝術大学首席卒業。同大学院修了。明治安田クオリティオブライフ文化財団の海外音楽研修生としてウィーン国立音楽大学で学ぶ。オペラはこれまでに、二期会『蝶々夫人』ピンカートン、日生劇場『ラ・ボエーム』ロドルフォの他、『ドン・ジョヴァンニ』ドン・オッターヴィオ、『ファルスタッフ』フェントン、『愛の妙薬』ネモリーノ等演じる。コンサートでも、ベートーヴェン「第九」、ロッシーニ「スターバト・マーテル」等幅広く活躍している。2020年11月日生劇場『ランメルモールのルチア』エドガルドで出演予定。二期会会員

バリトン／大沼　徹

Baritone／ONUMA Toru

東海大学卒業。同大学院修了。独・フンボルト大学で研鑽を積む。二期会オペラ研修所修了。第21回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。二期会『ローエングリン』テルラムント、日生劇場『フィデリオ』ドン・フェルナンド、グランドオペラ共同制作『カルメン』ダンカイロ等で出演。モーツァルト「レクイエム」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」等コンサートでも活躍している。2020年6月オペラ夏の祭典『ニュルンベルクのマイスタージンガー』、11月日生劇場『ランメルモールのルチア』エンリーコで出演予定。二期会会員

合　唱／もりおか「第九」特別合唱団

Chorus／Special Chorus for"Morioka－Beethoven 9th"

「もっと盛岡でプロ・オーケストラと共演する本格的な「第九」公演の機会を実現させていきたい」との熱い希望から、岩手県合唱連盟の協力のもと、今回の仙台フィルとの共演のために新たに結成された特別合唱団。学生から社会人に至るまでの盛岡の幅広い合唱人が集結し、佐々木正利の合唱指揮で、「オール盛岡」の素晴らしい合唱による歓喜の歌を高らかに響かせて、市民の熱い期待に応えます。

管弦楽／仙台フィルハーモニー管弦楽団

Sendai Philharmonic Orchestra

1973年創立。東日本大震災では数ヶ月間活動を中止せざるを得ない状態になったが、音楽を被災者のもとに届ける活動を展開し、大きな反響を呼んだ。

本拠地である日立システムズホール仙台での定期演奏会、さまざまなジャンルとの共演による「サマーフェスティバル」、県内各地で開催される「マイタウンコンサート」、日本人作曲家を紹介する「日本のオーケストラ音楽」展など多彩な公演のほか、全国小中学校訪問など年間100回を超える活動を展開している。

もりおか「第九」特別合唱団

— 出演合唱団 —

Amphis Chor
岩手大学グリーンコーラス室内合唱団
岩手大学合唱団
コーラスプリマヴェーラ
コールTonan
コール本宮
混声合唱団北声会
城南コーラス
女声合唱団ラ・フローラ
男声合唱団コールM
都南混声合唱団
盛岡コメット混声合唱団
盛岡大学附属高等学校音楽部
盛岡地区更生保護女性会コーラス部
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
山岸グリーンコール
熊友会ヴォーカル・アンサンブル

合唱監督	山田　靖了
合唱指揮	佐々木 正利
コンサートマスター	小原　一穂
	佐々木 幹雄
コンサートミストレス	小川　暁美

パートリーダー/サブパートリーダー	
ソプラノ	赤塚　温子
	藤原　優花
アルト	在原　泉
	田口 千紗都
テノール	西野　真史
	伊藤　陽平
バス	横山　泉
	及川　泰生

練習ピアニスト	雫石　環
	平井　良子
合唱団団長	茂木　容子
副団長	野沢　裕美
事務局長	在原　泉
事務局次長	菊地　美紀

ソプラノ

赤塚　温子	小田島 沙英	國井　泰子	佐々木 惠子	武田 利都子	藤田 知恵子
天坂　真悠	岡野 美映子	熊谷　充代	佐々木 裕子	田中　恵子	藤原　弘子
安東　泉美	岡山 ひかり	小坂　洋子	佐藤　千砂	千葉　厚子	藤原　優花
一戸　春乃	小川　幸子	駒木　美優	佐藤　峯子	千葉　一加	星　陽子
今井 由希子	小川　牧子	駒木 美和子	笹森　未夢	千葉 しおり	本良 いよ子
鵜浦　奈摘	小原　育世	昆　千晶	瀬川 多賀子	千葉 日向子	山根　日和
太田　和子	神谷　冨美	斉藤 美智子	高橋　栄子	富田　麻友	弥藤　和子
太田　彩里	菊地　美紀	斉藤　純子	高橋　武子	中谷 久仁子	吉田 真弥子
大橋　直美	北林　千恵	佐々木 あかり	鷹羽　静子	奈良 めぐみ	
大矢　克子	工藤　成子	佐々木　彩	田上　由紀	畑　育子	

アルト

在原　泉	川村 富貴子	櫻庭　優菜	平舘 恵美子	樋口 美保子	本間　小椰
石亀　智美	菊池　亜美	佐々木 紀子	武田　孝	檜山　奏子	三宅 真佐子
小笠原　史	菊池　郁	佐々木 陽翔	田口 千紗都	平井　良子	茂木　容子
小川　暁美	菊池　敏子	佐々木 ひとみ	続石 真奈美	平沢 美喜子	村上　洋子
小川　睦子	桐原　絹子	佐藤　杏香	栃内　泰子	福徳　実里	八幡　桃子
小山内 葉子	黒森　美里	佐藤　こと	長岡　菊子	藤澤　局子	渡辺 しをり
影山　桂子	壽　範子	荘司 美夏子	野崎　三津	藤澤　久子	
金子　千鶴	近藤 伊津子	渋谷　明子	野沢　裕美	藤代　伸子	
鎌澤　光子	坂本　奈緒	鈴木　佳子	花立 由紀子	堀　奈津子	

テノール

伊藤　陽平	小川　隆弘	佐々木 康勝	澤村　憲照	西野　真史	宮野　哲美
石亀 幸一郎	川野　耕大	佐々木 幸弘	武田　宏	藤井　颯太	
及川　剛	工藤　義之	佐藤　講郎	谷目　葉	藤澤　健	
太田　穎則	佐々木 幹雄	沢田　泰人	千葉　圭悟	舞田　寛武	

バス

秋山　信愛	小澤　海斗	小菅　悠樹	東海林 隆幹	遠山　宜哉	横山　泉
伊藤　浩司	小原　一穂	堺田　紋斗	鈴木　直揮	芳賀　郁夫	吉田　大成
宇津野 智成	菊池　幸吉	坂本　啓祐	高橋　聡	橋本　豊	
及川　泰生	久保　輝汐	佐々木 保雪	滝沢　一郎	平沢　知之	
及川　尚樹	熊谷　淳	佐藤　和久	武内　晃	松橋　清	
大橋　弘治	壽　和幸	佐藤　芳郎	千葉　正信	山田　拓巳	

プログラムノート

広瀬　大介（音楽学・音楽評論）

ベートーヴェン：『レオノーレ』序曲 第3番

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）が唯一残したオペラ『レオノーレ』（最終的には『フィデリオ』に改名）を巡る上演事情は、かなり複雑である。1798年、ジャン・ニコラ・ブイイの台本、ピエール・ガヴォー音楽による『レオノールあるいは夫婦愛』がパリ・フェイドー座で初演された5年後、ベートーヴェンがオペラの作曲を始めている。

- 1805年11月20日：ヨーゼフ・フェルディナント・ゾンライトナーが台本を担当。アン・デア・ウィーン劇場にて『レオノーレ』第1稿初演（序曲第2番）。
- 1806年：シュテファン・フォン・ブロイニング、第1稿の台本を、3幕から2幕に改作し、3月29日に『レオノーレ』第2稿初演（序曲第3番、本日演奏）。
- 1807年：プラハでの上演用に序曲を作曲（実現せず）（序曲第1番）。
- 1814年5月23日：ゲオルク・フリードリヒ・トライチュケの改訂による、『フィデリオ』と改名された第3稿が初演（『アテネの廃墟』序曲）。5月26日の第2回公演で『フィデリオ』序曲がはじめて演奏される。
- 1822年11月3日：最終改訂稿がケルントナートーア宮廷劇場で上演。

革命の強権支配から脱出する英雄物語は、当時の世相をもっとも良くあらわす題材であり、政敵ドン・ピツァロによって獄中にとらえられた英雄フロレスタンを救い出す妻レオノーレの可憐かつ芯の強い人物描写は、多くのひとの胸を打った。絶対王政にも、フランス革命にも、そしてナポレオンの帝政にも絶望した1810年代のベートーヴェンは、本当の意味で目指したユートピア的な共和制の世界観を、自作のさらなる改訂を通じて反映させようとした。

最終的な勝利を感じさせる『交響曲第5番』と同じハ長調を用い、ソナタ形式の中に、劇の内容を暗示するかのような闘争をあらわすモティーフと、フロレスタンが登場する第2幕のアリアの旋律が組み込まれる（『フィデリオ』に付けられた新しい序曲では、劇中のモティーフは用いられなかった）。数多くの『レオノーレ』『フィデリオ』序曲の中で、このもっともドラマティックな「第3番」は、後期のベートーヴェン作品を暗示する力強さに溢れている。

ベートーヴェン 交響曲第9番 ニ短調 作品125「合唱つき」

1814～15年、ドイツ、オーストリアでは、ナポレオンに蹂躙された後の国土をどのように治めていくかを決める「ウィーン会議」が催された。この会議によって、大陸の政治体制を以前の状態に戻す、いわゆる「三月前期」と呼ばれる政治体制が約30年間にわたって続くことになる。後戻りできない勢いで進展する産業革命によって、資本者層と労働者層、知識人とそうでない人々は決定的に分離。この分離は、それまでとは形を変えた階級社会の出現でもあった。

オーストリア帝国の外務大臣・そして後に首相を務めたクレメンス・フォン・メッテルニヒは、この「三月前期」に、共和主義的、愛国主義的な活動を行う人物を徹底的にマークし、弾圧を加え、アンシャン・レジームを堅持しようとした。帝国の首都ウィーンに住んでいたベートーヴェンも、貴族社会を尊ばぬ共和主義者と目され、監視の対象とされる。ナポレオン没落後、一寸先も見通せぬ閉塞的な政治的・社会的状況の中、ベートーヴェンは怒りと鬱屈と、そして不安を募らせていた。

詩人・劇作家フリードリヒ・フォン・シラー（1759-1805）が、金銭面・精神面で支えとなったクリスティアン・ケルナーへの友情の証として執筆した「歓喜の歌」（1785）。単なる友情の讃歌にとどまらない、全人類の友愛を歌いあげる讃歌として、壮大なメッセージ性を担ってもいたが、ナポレオン没落後、そのような兄弟愛を実現できる社会的情勢は、遙か昔のものとなってしまう。

だが、1793年の段階で、すでにベートーヴェンは、この「歓喜の歌」に付曲するという構想を練っていた。実際の作曲は、世相が大幅に変わってしまったとはいえ、1818年から断続的に続く。1824年5月7日、ウィーン・ケルントナートーア劇場での初演では、《献堂式》序曲、《ミサ・ソレムニス》より「キリエ」「クレド」「アニュス・デイ」が同時に演奏された。23日、レドゥーテンザールでの演奏では集客に失敗しており、時代に先んじた作品が受け入れられるまでにはなお幾ばくかの時間が必要、という運命を、この作品も免れなかった。ただ、政治的・社会的な文脈という視点からこれらの逸話を眺めれば、この作品に込められたメッセージを「正しく」読み取った上流階級の聴衆が、敢えてこの作品に背を向けた、という可能性も排除できない。

第1楽章冒頭で用いられたニ短調という調性は、歌劇《ドン・ジョヴァンニ》序曲の冒頭、そして第2幕の最後で用いられる、悪逆を尽くした主人公がいよいよ地獄へと引きずり落とされる場面を想起させる。また、《ミサ・ソレムニス》作曲時には、同じくニ短調で作曲されているモーツァルトの名曲《レクイエム》にも目を通している。《レクイエム》の激しいディエス・イレも、静謐なラクリモーサも、いずれも同じニ短調だった。

霞のように茫漠とした風景の中から立ち現れるホ音とイ音。長調・短調を決定することのない第三音を欠く空虚五度が積み重ねられ、音楽がどこへ向かうのか、すぐには判然としない。やがてホ音は下行してニ音へと落ち着き、短調を決定する第三音、ヘ音が加わる形で、ニ短調の主和音を構成する三つの音によ

る下行アルペジオが、全体の主題を形作る。堂々たるソナタ形式は、ベートーヴェン自身の歩みの集大成でもある。

スケルツォ、**第2楽章**で異例だったのは、楽曲の規模の大きさであった。オクターヴで下行する、鋭いリズムを含む三つの音によるモティーフが、ティンパニなど各所で執拗に繰り返されながら、曲全体の構造を形作っていく、ベートーヴェンが得意としたいわゆる動機労作の手法は、この楽章にも用いられている。

第1楽章の提示部でニ短調に次いで重要な位置を占めていた変ロ長調が、**第3楽章**では主要な調性として据えられ、第1主題を形成する。これに次いでニ長調による第2主題が登場。その後この主題と、第1主題の変奏が入れ替わり立ち替わり現れる。ホルンによる長い独奏、二台のティンパニを同時に鳴らす重音奏法など、当時の最新の楽器を見据えた新たな工夫も見られる。

先行する三つの楽章も、それまでの交響曲に比べればはるかに長く、大きな規模を有する楽曲であったが、声楽を加え、異なる世界観の合一を歌いあげる**第4楽章**は、さまざまな形式を寄せ集めたメドレー形式と呼ぶべきか。導入部分では、チェロ・コントラバスによる、人の語りを模したようなレチタティーヴォと、先行する三つの楽章の主題が交互に現れ、その三つの主題が力強く否定されていく。

やがて、チェロとコントラバスによって、おずおずと、しかし、しっかりとした歩みで、全曲で初めて登場する「歓喜の歌」の主題。他の楽器へと受け渡され、徐々に膨らみを増し、管弦楽の総奏によって、高らかなファンファーレとして鳴り響く。この過程こそ、すでに聴き手が第1楽章の冒頭で経験した世界の生成が、ニ短調ではなくニ長調で、新たな力強さをもって再現される。

やがてその調和の世界の一角が崩れ、それまでの音楽を否定する詩、「友よ　そんな歌ではなく O Freunde, nicht diese Töne!」からの2行は、シラーの詩にベートーヴェンがあとから付け加えたもの。そして、はじめて歌詞に乗せて歌われる「歓喜の歌」。この後に現れる合唱、テノールの軍楽隊風の行進曲（変ロ長調）、管弦楽によるフーガ、合唱による「歓喜の歌」の斉唱は、いずれも「歓喜の歌」の変奏曲と考えて差し支えないだろう。この変奏ひとつひとつが、「歓喜の歌」を永遠不朽の名旋律として聴き手の記憶に刻む役割を果たしてきた。

この歓喜が一段落つくと、伝統的に宗教的な威厳を表現する際に用いられてきたトロンボーンに導かれ、男声合唱が負けじと「抱き合うのだ　すべての人よ Seid umschlungen, Millionen!」と咆哮する。それまで世俗的な歓びを歌ってきた楽章が、急に雰囲気を変え、宗教的な次元へとその歩を進めるのである。しかし、本当に驚くべきはこの後、「歓喜の歌」の旋律と、この「抱き合うのだ　すべてのひとよ」の旋律、つまり世俗的なるものと宗教的なるものが、同時に二重フーガとして演奏され、両者が同時に存在し、高め合う理想郷が、音楽の力によって描かれる。ベートーヴェンはシラーの詩からさまざまに想像を膨らませ、オペラ的な表現力と、器楽的な構成力を、まさに力業としか呼びようのない手法で結び合わせた。

ベートーヴェン《交響曲第9番》第4楽章 歌詞

フリードリヒ・シラー「歓喜に寄すAn die Freude」

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern lasst uns angenehmere anstimmen,
und freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum!

Deine Zauber binden wieder,
was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der große Wurf gelungen,
eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
mische seinen Jubel ein!
Ja, wer auch nur eine Seele
sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
weinend sich aus diesem Bund

Freude trinken alle Wesen
an den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
folgen ihrer Rosenspur.

Küsse gab sie uns und Reben,
einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen,
durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder! über'm Sternenzelt
muss ein lieber Vater wohnen.

Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such ihn überm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

友よ　そんな歌ではなく
もっと愉しく
うれしくなるような　歌をうたおう

歓びと　美しき神の燦めき
楽園の乙女がいる　聖なる場所に
私たちも　心躍らせながら
足を踏み入れよう

時が経てば　離れるけれど
その魔法で　またひとつになれる
私たちは　友となる
やわらかな翼に包まれて

運のいい人間は
優しい友を　見つける
私たちと一緒に　喜ぼう
優しい女性と　結ばれたなら
この世で唯一
心を許せる人がいる　あなたも
そんな人が　見つからなければ
喜びの絆から　そっと去っていくだけ

自然の恵みから　歓びを受ける
生きとし生けるもの
良きものも　悪しきものも
バラ色の足跡を　たどる

皆でよろこべば　口づけとワイン
そして死と格闘する　友が得られた
虫けらにも　官能の悦びが与えられ
神の御前には　聖なる天使が立っている

よろこべ　自らの道を走ろう
まるで太陽が　宇宙の壮大な法則に従って
動いているように
歓びに満ち　勝利に向かって走る偉人のように

抱き合うのだ　すべてのひとよ
この口づけを　全世界に
兄弟よ　星空の彼方に
愛すべき父なる神が　おわすはず

ひれ伏さぬのか　すべてのひとよ
創造主を　身近に感じるか　世界よ
星空の彼方に　神を求めよ
その彼方に　神はおわすはず

（訳：広瀬　大介）

公益財団法人 仙台フィルハーモニー管弦楽団

SENDAI PHILHARMONIC ORCHESTRA

会　　長　郡　和子（仙台市長）
顧　　問　村井　嘉浩（宮城県知事）
創立理事長　故藤﨑三郎助（6代）

常任指揮者　飯守泰次郎
レジデント・コンダクター　高関　健
指揮者　角田　鋼亮
桂冠指揮者　パスカル・ヴェロ

コンサートマスター　神谷　未穂
西本　幸弘

1st Violin
○宮﨑　博
伊部　祥子
熊谷　洋子
小山あずさ
坂本奈津江
竹内　崇子
ネストル・ロドリゲス
ヘンリ・タタル
松山　古流
三塚　美秋
柳澤　直美

2nd Violin
○山本　高史
□小川有紀子
大友　靖雅
岡村　映武
木越　直彦
小池まどか
佐々木亜紀子
近田　朋之
徳永もと子
長谷川　康
村上　達俊

Viola
◎井野邊大輔
青木　恵
梅田　昌子
寺澤　正晴
百々　暁子
長谷川　基
御供　和江

Cello
◎三宅　進
○吉岡　知広
北村　健
高橋　咲子
田澤　緑
八島　珠子
山本　純

Double Bass
◎助川　龍
□名和　俊
河野　昭三
黒江　浩幸
田中洸太郎

Flute
○戸田　敦
□芦澤　暁男
山元　康生

Flute & Piccolo
宮嵜　英美

Oboe
○西沢　澄博

Oboe & English Horn
木立　至

Clarinet
○ダビット・ヤジンスキー
＊下路　詞子
鈴木　雄大

Bassoon
○水野　一英
海野　隆次
入交　滋

Horn
○須田　一之
大野　晃平
木下　資久
中村　隆司
溝根　伸吾

Trumpet
○森岡　正典
浦田　誠真
戸田　博美

Trombone
○菊池　公佑
松崎　泰賢
矢崎　雅巳

Bass Trombone
山田　守

Tuba
○ピーター・リンク

Timpani
○竹内　将也

Percussion
佐々木　祥
三上　恭伸

Chief Inspector
我妻　雅崇

Inspector
＊下路　詞子
名和　俊
浦田　誠真

Chief Librarian
水野　広明

Chief Stage Manager
大久保斉象

Stage Manager
吉田　学史

◎印…ソロ首席
○印…首席
□印…副首席
＊印…留学中

本日の客演奏者

1st Violin　酒井　寛樹
平松　典子

2nd Violin　小平　怜奈
宮本　有里
山澤めぐみ

Viola　岡　さおり
坂本　晴人
中村　里子
尹　鳳喜

Cello　猪俣麻衣子
広田　勇樹
松本　恒瑛

Double Bass　高橋　彗希
吉田　真弓

Oboe　鈴木　純子

Clarinet　野田祐太郎

Horn　深澤　仁

Trumpet　長田　桜咲

Trombone　山口　尚人

Percussion　前田　秀明

●理事長
高橋　宏明

●副理事長
鎌田　宏
片岡　良和
大山健太郎
藤﨑三郎助

●専務理事
寺内　譲

●常務理事
松川　真也
太田　卓造
磯貝　純一

●理事
氏家　照彦
遠藤　信哉
小野木克之
亀井　淳一
境　洋文
澁谷由美子
須佐　尚康
藤本　章
松良　千廣
村井　泰介
八代　浩久

●監事
鈴木　友隆
八木　洵

●評議員
阿部　一義
天野　元
一力　敦彦
今井　邦男
浦沢みよこ
大泉　勉
大森　克之
加川　浩之
熊谷　壽道
佐藤　英夫
鈴木　繁雄
高橋　知子
田中　昌志
田中　正人
平賀　ノブ
茂泉　劦佐
山形　安生
若狭　友子

●事務局長
松川　真也

●参与
大澤　隆夫

●総務部
部長　太田　卓造
次長　鈴木　顯
主査　太田　祥恵
　　齋藤　静香

●事業部
部長　磯貝　純一
主査　長谷山博之
主任　水野　広明
主任　我妻　雅崇
主任　関野　寛
主任　大久保斉象
　　伊東　広大
　　力石　尚子
　　後藤　美幸
　　吉田　学史
　　金今　茉那
　　氏家　一葉

2019年11月17日発行　非売品　公益財団法人 仙台フィルハーモニー管弦楽団
〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-3-9　TEL：022-225-3934　E-mail：info@sendaiphil.jp　URL：https://www.sendaiphil.jp/
発行人：寺内　譲　デザイン：株式会社佐々木印刷所